

末黒野

すぐろの

8月号 (通巻780号)



八重桜

小川玉泉

二人目の曾孫の安産朝ざくら
半月の俯き様や夕ざくら
後退りして全容を紅枝垂
半球の形おのづから紅枝垂

花の精いづくに棲むや八重桜
神鏡に映り盛りの八重桜
春惜しむかに山鳩の含み声
余震また枝を彩る桜の実
柿若葉結ひ替へられし四つ目垣
甘き香の梅花空木やとのぐもり
四十雀朝の静寂へ声降らす
神鹿の瞳に映り山若葉

蝮の道

松本三千夫

大仏の児童吐き出す子供の日
島裏の 一社 一寺や 卯月波
青しぐれ回転ドアに背を押され
現し世を映し青田の二三寸
堰落つる水奔らせて蝮の道
啼き競ふ谷の老鶯馬手弓手
青葉光炭焼小屋の幣古び
風渡る青蘆原の水錆びて
明易や塔の十字架雲寄せず
星は光新樹は闇を深めをり
潜水艦指呼を眠らせ薔薇香る
緑蔭の海へ展けて砲座跡

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

早苗饗

田中臥石

晩春の鶴見の一期一会かな
総持寺に遊べり春の樟若葉
地に躑躅天に落日国技館
里山の径に摘みゐる三ッ葉芹
木斛の風薫りけり回向院
早苗饗の娘の家や高榎
田廻りの娘両手に補植苗
木より剥ぐ夏椎茸や山暗し
夏立つや余震に麻津の街明かり
青葉潮膝濡らしつつ貝搔けり

花吹雪

大橋伊佐子

芽木の道つきて怒濤の九十九里
咲ききつて終章かざる花吹雪
花疲れ最初にはづすイヤリング
散る花を肩に卒寿となりにけり
髪切つて春愁少し軽くせり
駆くること覚えし仔馬日粲粲
立ちどまり聞く筒鳥のはるかかな
郭公の声を消し去り雨俄か
くつきりと山脈見ゆる吹き流し
妣の里へ越ゆる峠や余花白く



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

竹落葉

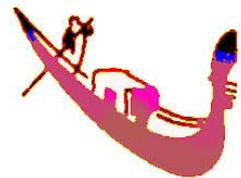
乙坂きみ子

五月来ぬ蒼を分ちて空と湖
風見せて湖心に向かふ竹落葉
湖よりの風ふところに夏夕べ
万緑の底より届く水硯
山深き営林宿舎茄子の花
峡と町つなぐ吊り橋朴の花
青梅の落ちたる夜の深みかな

竹の秋

加藤静江

落葉松の芽吹き命の噴くごとく
蝌蚪群れて水黒ぐろと動きけり
惜春や山巒白き伊吹山
淡墨てふ皇子お手植糸の桜かな
暮の春海は沖までとの曇り
目交に泛かぶ初島竹の秋
春潮の銀びかり島ひとつ



緑立つ

菅野日出子

地震

城戸緑

舩挿しに水鳥の群湖の青
天守より霞の底の漁舟
二代目のお宮の松や緑立つ
つばくちや網代の糶場閑散と
山腹の湯宿を包み紅躑躅
揚げたての鮎に舌焼く琵琶湖畔
蘇鉄咲く熱海の浜の細小波

春蘭に屈みて地震をやり過ぐす
余震またナースの声や黄水仙
花の雨病棟の窓叩きけり
病院食きれいに食べて夕桜
海境の点は巨船か桜東風
川筋は裏窓ばかり初燕
花時計刻の確かや風薫る

老鶯 菅野蒔子

惜春 熊切光子

晩春の日ぐれや涙もろく居り
ばらの花己はげますために剪る
地震傷みの土手のシートや麦の秋
加護坊は自衛隊通信の基地山若葉
早乙女も唄も昔や機械植糸
田植機を見送る鶯のいかり肩
老鶯やこの一打差を詰めきれず

山桜満ちて山容ととのへり
とどまるも行くも川面に散るさくら
春昼や庭石の影もたれ合ひ
海光の火山灰よに散らばり落椿
沼波やメタセコイアの風光る
惜春や影をひきずる夕鴉
思ふほど揺れぬ吊橋花うつぎ

青炎集

小川玉泉選



横浜 上月智子

新宿 稲垣佳子

客人へつぎつぎ注ぎ桜漬

重たげにランドセルの子花は八重

山藤や小さきバスの折返し

日の丸もくくられてをり鯉幟

佳き事と少しの愁ひカーネーション

岩盤に育つ筍歪みをり

横浜 土田 亮

横浜 中野久雄

雨意の風桜葵ふる通学路

泥の手に受くる夕刊菊根分

余震また花大揺れの君子蘭

宅配の郷の蛤鳴く夕べ

杭残る渡し場の跡真菰の芽

藁屋根の続く宿場や麦の秋

嘯りや三つ巴なる鬼瓦

春昼や路地に鍛冶屋の槌の音

息づまるほどに蠢き蝌蚪の群れ

鳴き競ふ夏鶯の小谷戸かな

街道の低き家並や菖蒲茸く

外苑にむらさきの雨桐の花

風なきに花散り止まぬ城址かな

花冷えや塔影揺るる心字池

山間の里の静けし竹の秋

草原の浮雲一朵風薫る

雨上り若葉目に染む白馬村

賑はひの若宮大路花は葉に

横浜 山崎稔子

一山の躑躅さかりや風の海
潮の香の路地に漂ひ松の芯
気付かれず森に増えたるほくりかな
出航の汽笛の三度夏つばめ
日にほひ風のにほひや新樹光
谷戸深き池の澱や未草

横浜 外山生子

葦の芽の二寸の揃ひ沼明かり
里人に馴れて番の残り鴨
夕暮れて山藤山に溶けこみぬ
久びさに夫と銀ぶら春の宵
紅深む夕日重ぬる花水木
牡丹に心移して小半時

横浜 高橋定峰

結界の日差しのやはら春紫苑
グライダーの影かるやかに春の山
無住寺の笥を奔る春の水
雨あとの木々の芽まぶし空の青
明日知れぬ定めを生きて青き踏む
ぼんぼりの淡き灯影や花の庭

横浜 小嶋紘一

海風のかかけのぼる立夏かな
幾百の鯉はねまはる幟かな
新緑やあと百段の奥の院
紫蘭咲く葉のゆれて雨たえまなし
高層のベランダかすめ夏つばめ
さざなみのなかや青蘆日を返す

横須賀 大川暉美

宮鳩の遊ぶ薨や風光る
聖五月拳開きて眠る稚
たくましき少年の脛磯遊び
風通ふ道に群れなし罌粟の花
木道や夏鶯の声を背に
鯉幟泳ぐ旧家や風新た

横浜 大内由紀

色の名を指折り数ふチューリップ
古書店の目当ての本や春夕焼
夢を見る年頃でなし春愁
翠微より生るる白雲夏来る
鎮飾りの單車風切り山若葉
丸めたる反故に卯の花腐しかな

巨林抄

雲 軽 し 新 樹 の 下 の 握 り 飯	遠 く よ り 思 ひ を 戻 す 蝶 の 昼	句 作 り は 心 の 糧 や 巢 立 鳥	木 の 芽 風 万 年 堀 を 猫 走 る	家 具 の 向 き 変 へ て 風 呼 ぶ 夏 座 敷	喜 多 院 の 触 れ て 涼 し き 羅 漢 か な	椶 の 芽 の 香 り ほ の か に 道 の 駅	京 の 町 沈 ま せ て ゐ る 黄 砂 か な	絵 に 文 字 に 丘 一 面 の 芝 桜	道 草 の 限 り を 尽 す 蝮 の 道	菖 蒲 太 刀 賢 兄 愚 弟 共 に 老 い	さ み ど り に 溺 れ 一 番 茶 を 摘 め り
鶴 見 董 子	森 一 枝	細 島 孝 子	浅 岡 麻 實	吉 田 美 智 子	中 村 月 代	庵 原 敏 典	谷 口 律 子	遠 藤 清 子	伊 藤 平 八	土 屋 実 郎	長 谷 川 惇 子